

## C-23) 骨内に認められた Cranial fasciitis の一例

浜名 圭子, 中山 雅弘, 桑江 優子, 竹内 真

**症 例:** 症例は 8 ヶ月の男児. 生後 4 ヶ月頃から右側頭部の腫瘤に気付かれ, その後わずかに増大傾向を認めていた. 5 ヶ月時の CT では右頭頂骨直上の皮下にレンズ型腫瘤を認め, 直下では骨の外板が欠損し, 内板も菲薄化していた. (図 1-A) その後の画像検査で腫瘍は骨内に移動し, 直径 12mm, 厚さ 5 mm, 骨内より外板, 内板の両方を圧排し, 一部では内板を破壊し硬膜に接していた. (図 1-B) 8 ヶ月時に周辺の骨を含めて摘出が行われた.

**肉眼所見:** 腫瘍は円盤状に盛り上がった骨組織にほぼ完全に覆われ, 内側の一部で骨が欠損し, 同部位に出血を認めた. 弾性軟で, 断面はやや黄色い灰色を呈し, 周囲の骨組織と概ね境界明瞭だった.

**組織所見:** 明瞭な核小体を持った楕円形の淡明な核と, 好酸性の細胞質を持った短紡錘形の腫瘍細胞が storiform pattern をとって増生している. (図 2) 核分裂像は殆どない. 腫瘍と周囲の骨組織の間にはゆるい線維性の結合組織を認める. 腫瘍内にはやや細長い胞体に 5 から 8 個の核を持った多核巨細胞を認める. (図 3) 免疫組織染色では腫瘍細胞は Vimentin, SMA, CD68 が陽性で, S-100, Desmin, EMA, CD34 は陰性であった. 以上より本症例を Cranial fasciitis と診断した.

**考察:** Cranial fasciitis は 2 歳以下の男児に好発し, 通常は頭蓋骨の外側に発生し, 急激に増大し, 骨の融解を伴い内部へ増殖し, 髄膜に達することもある. 病因は不明であるが, 外傷による反応性病変の可能性が示唆されている. 組織所見は短紡錘型の明瞭な核を持った細胞が fascicular または storiform pattern で増殖し, 一部では myxoid な部分も見られる. Osteoclast 型の巨細胞を伴う. 被膜は持たないが周囲とは概ね境界明瞭である.

図 1

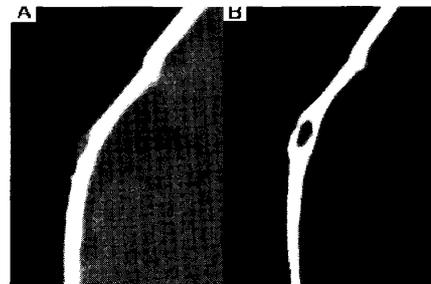


図 2

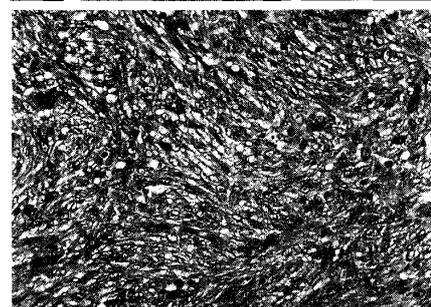
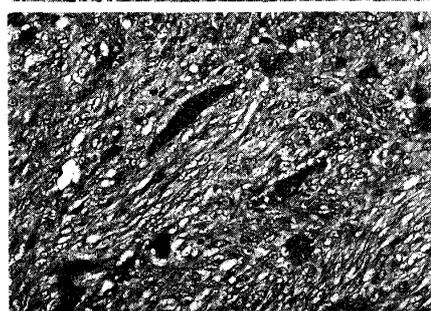


図 3



以上の所見は Nodular fasciitis の組織像と酷似するが, Cranial fasciitis では巨細胞が多い特徴がある. 完全摘出が出来れば予後は良好.

本症例では当初頭蓋骨の外側に発生した腫瘍が外板を破壊し, さらに反応性の骨形成を行った結果, 骨内腫瘍に至ったと考える. Cranial fasciitis で見られる急激な増大傾向は軽微で, 外傷の既往も不明であった.

## 文 献

Sarangarajan R, Dehner LP : Cranial and extracranial fasciitis of childhood: A clinicopathologic and immunohistochemical study. Hum Pathol. 1999 Jan, 30(1) 87-92